

# 真田家ゆかりの《知略》で目指す 市民と広域圏の幸福度向上

## 真田三代以来の中心都市・上田の 21世紀的発信

今年7月27日、長野県上田市・東御市・青木村・長和町・坂城町・立科町の2市3町1村による「上田地域定住自立圏形成協定」が締結された(上田市による中心市宣言は2月3日)。

少子高齢化に伴う人口減少という不可避のトレンドを受け、中心市と周辺市町村が定住化促進という目的の下に広域都市圏を形成。

中心市がその広域都市圏に必要な都市機能を整備し、周辺市町村が広域圏に必要な生活機能を確保するという役割分担を行いながら、互いに連携協力しつつ地域全体の人口定住化を目指す定住自立圏構想は、現在、全国各地で続々と形成されている(平成23年10月12日現在で72市が中心市宣言を行い、61圏域が定住自立圏を形成)。

折しも今年10月には、最新の国勢調査(平成22年実施)の結果が発表され、前回(平成17

年実施)より国内に住む日本の人口(外国人居住者を除く)は37万人強も減少したことが分かった。人口減少化の現象がいよいよ顕著になったともいえるだろう。

「定住自立圏に限らず、少子高齢化などに伴って激化する一方の都市間競争を背景に、今後はさまざまな目的を持った広域圏的ネットワークの形成がさらに重要になっていくと思います」

そう語るのは母袋創一・上田市長である。

「上田市はこれまでも上田地域(上田市・東御市・青木村・長和町・坂城町)の中心都市として推移してきました。上田市単体の人口は約16万人ですが、上田地域全体に広げれば約22万人となります。また歴史的に文化圏を共有してきた佐久地域を併せた東信地方(上田・佐久地方)全体にまで広げると、約40万人もの広域圏ということになります。そうした面的な意味での広域圏とは別に、一定の目的意識の下に、離れた地域の都市同士がネッ



上田駅前で見守る真田幸村公銅像

長野市・上田市、大阪府大阪市、和歌山県九度山町など全国12市町村が参加した。また真田幸村が大坂の陣の折に大活躍した縁で、上田市と大阪市は平成18年、「上田城と大阪城との友好城郭の交流提携」を結び、幅広い活動を展開している。さらに幸村の兄・信之が城主を務めた沼田城がかつてあった群馬県沼田市と上田市は、上田市から群馬県吾妻郡・利根郡を経て沼田市へとつながる街道沿いの自治体が昨年より連携を開始した「真田街道推進機構」を通じ、今後、広域観光や市民の文化交流などの企画を積極的に展開していく予定だ。

そして今、上田市をはじめとする「真田三代」にゆかりの全国の都市が大きな期待を寄せているのが、上田市民有志でつくる「NHK大河ドラマ日本一の兵真田幸村公 放映の実現を願う会」(平成21年)の活動である。

「真田幸村公放映の実現を願う会」は、幸村公の大坂城入城400周年となる平成26年までに、幸村公を主役とするNHK大



赤備えの戦国絵巻が展開する上田真田まつり

河ドラマ放映の実現を目指す団体で、真田家の家紋である六文銭にちなんだ66万6666人の署名を集めるべく運動しています。私が上田市民の代表として会長を務めさせていただいておりますが、署名は1年9カ月程度で60万人を超えるスピードで集まり、今、大いに盛り上がりつつあります(母袋市長)

大坂夏の陣で自ら率いる「真田の赤備え(武器を赤で統一した部隊)」が大活躍したことにより、「日本一の兵」と称賛された真田幸村。その幸村が主人公の大河ドラマが実現すれば、武田信玄・織田信長・豊臣秀吉・徳川家康などの名高い戦国大名と絡みながら大活躍した真田三代が真田十勇士も含まれてくると期待が高まるのも当然だろう。

ちなみに60万人分の署名は、上田市民や周辺市町村の市民、上田市を訪れた観光客や全道道府県にわたる真田ファンからの直接署名に加え、世界からもインターネットで寄せられている。「ゆかりの自治体」からの協力も含め、真田三代という上田市の「宝」がメディアとなって形成された全国ネットワークの、まさに真ん中に上田市があるという形が自然に連想されてくる。

### 市民が集い文化芸術の薫る 新市街地の形成

市政ルポの取材を通してここ数年、各地域

における「元気な中核的都市」の共通点として強く感じるのは、流通大手や飲食チェーンの集中的な進出の構図である。その背景にはさまざまな「商業的判断」が複雑に絡み合っているはずだが、一つだけ明確に言えるのは、現代の流通大手や飲食チェーンは他地区への進出に当たって非常に厳密なマーケティングを敢行していることだ。

かつてのように、単に人口の多そうなることへ進出するのではない。国の中長期的な地方政策における当該都市のエリア内での位置付け、当該都市のマグネット的資質(将来性の有無、市民の生活水準の推移、地価の推移、エリア内における当該都市の多角的な存在感(周辺都市からの通勤先になっている比率や、周辺都市も含めた休日の人流など)の比較など、実に多角的に検討される。

これらの要件はまさに、前述した定住自立圏構想における「中心市」に求められている各種要件と、いろいろな部分で重なっている。上田市の中心市街地につながる上田駅「お



母袋創一  
上田市長

トワークを形成する  
というようなケースも、  
今後はどんなケースも、  
ではないでしょうか(母袋市長)

そうした動きは90年代から盛んになった各種サミットの開催にも見られる。上田市が中心的な位置付けで、平成10年から全国持ち回り開催されてきた「真田サミット」は典型的な事例だ。上田を中心とする信州を主舞台に活躍し、戦国武将の中でもよく知られる真田幸隆・昌幸・幸村の真田三代にゆかりの自治体で構成する真田サミットには、秋田県由利本荘市、宮城県白石市、群馬県沼田市、長野県



存続のための公的支援が続く別所線(千曲川)



開湯1200年の歴史を誇る別所温泉 大正浪漫風のいでたちで観光客を迎える別所温泉駅の駅長さん

## 智将・真田幸村の魅力に 急増する女性観光客

ところで先に触れたローカル鉄道・別所線

原高原を南端とする南側(別所温泉側)の市域も、全体的に多くの史跡や温泉が満遍なく配置されている。上田地域定住自立圏に参加した東御市をはじめとする各自自治体、上田市の東西にバランスよく位置しているのも分かる。

長野新幹線やしなの鉄道(旧信越本線)、さらに千曲川はその上田市域のほぼ真ん中を貫いている形だが、上田城跡公園から千曲川に至るエリアは市域のご真ん中にある。つまり駅を挟んで現出する広大な中心市街地の位置取りは、上田市のご真ん中であると同時に、上田地域および上田地域定住自立圏においても真ん中にあることが分かる。巧まずして絶妙な位置取りになっているのだ。



交流・文化施設鳥瞰図(合成)

ルや美術館と緑地広場などの交流・文化施設、上田警察署、住宅地区、公園などからなる新市街地建設のための土地画整理事業(丁T開発地整備計画約20ha)が実施された。

取材時には流通大手による大型ショッピングセンターが既にオープンし、住宅街が半ばまで完成しているのを見ることができたが、丁T開発地整備計

画の中核は何といってもこれから建設が本格化する、延べ床面積約1万7000㎡の交流・文化施設、約1万7000㎡の緑地広場、約400台収容の駐車場などからなる交流・文化ゾーンの存在だろう。

とりわけ音楽・演劇などの本格的公演や大規模コンベンションも可能なホール(大ホールは基本1530席・最大1650人収容、小ホールは320席)や、地域の未来を担う子どもたちの感性を育む「子どもアトリエ」の設置などで特徴を持たせた美術館などが一体化した交流・文化施設(名称は未定)は、上田地域の文化・芸術施設の拠点であるとともに、地域の魅力と活力を生み出す一つのシンボル施設と位置付けられている。

「ご承知のように文化・芸術というのは、それに接する人々の感性を磨くだけでなく、生きる上での支えにもなるものです。そうした市民が増えれば増えるほど、地域の持つポテンシャルは活性化していきます。市民生活が生き生きとしたものになり、交流の機会が増えることなどで、経済活動なども含めた地域の構成員素全般が動き始めるからです」(母袋市長)

駅に隣接した地区においてこのように大きな役割が期待される交流・文化施設、大型ショッピング施設、新しい住宅街などで構成される丁T開発地の建設プロジェクトと並行して、開発地と新幹線を挟んで反対側の上田



上田城千本桜まつりでにぎわう上田城跡公園



世界的照明デザイナー・石井幹子氏プロデュースによる上田城・夜桜ライトアップ

「営利事業として見れば、まだまだ厳しい状況は続いています。別所線は大正10年から観光客を別所温泉に運び続けてきており、観光を主要産業の一つとする上田市のシンボルでもあります。そういう意味からも存続に向けて、今後でもできる限りの支援を実施していくつもりです」(母袋市長)

別所線再生支援協議会の別所線存続支援活動や利用促進への取り組みは国土交通省「平成20年交通関係環境保全優良事業者等大臣表彰」を

は、風光明媚を絵に描いたような信州の山里の風景の中を、別所温泉までのんびり走るため観光客に非常に人気の高い路線である。しかし、車社会の進展などもあって、やはりどうしても乗降客数に限りがある。おまけに平成12年・13年に発生した京福電鉄越前本線(現・えちぜん鉄道)の列車衝突事故を契機に行われた国の安全性緊急評価事業の結果、改善の必要性が指摘された。それによって多額の設備投資が必要となり、存続の危機に揺れた。

この危機に際して上田市は平成16年度以降、公的支援を継続実施している。同時に関係25団体が結成した再生支援協議会による再生支援計画も実施され、「乗って残そう! 別所線」を合言葉に、存続を願うさまざまなイベントなどが現在も積極的に行われている。

「営利事業として見れば、まだまだ厳しい状況は続いています。別所線は大正10年から観光客を別所温泉に運び続けてきており、観光を主要産業の一つとする上田市のシンボルでもあります。そういう意味からも存続に向けて、今後でもできる限りの支援を実施していくつもりです」(母袋市長)

別所線再生支援協議会の別所線存続支援活動や利用促進への取り組みは国土交通省「平成20年交通関係環境保全優良事業者等大臣表彰」を

受賞。関係各位の存続支援への思いの強さのしるし。

別所線はまた、実写映画はもちろん、アニメ映画(平成21年公開の映画『サマーウォーズ』)においても人気の舞台となっており、今後の再生支援が注目される。

別所線だけではない。鎌倉時代から近代に至るまでの数多くの歴史文化遺産が現存し、豊かで美しい自然環境に囲まれた山間都市として特徴的な風光を持つ上田市は、これまで数多くの監督による映画作品、テレビ作品のロケ地になってきた。

今年で設立10周年を迎える信州上田フィルムコミッションも協力している作品数は、映画だけで100作品近く、テレビ・写真集も加えれば相当数に上り、巨匠と呼ばれた映画監督の多くが、上田市で撮影している。今年9月末には国内約80のフィルムコミッションが上田市に集結し、ジャパン・フィルムコミッションの全国総会が開催されたが、日本を代表するロケ地の一つでの開催とあって、映画・ドラマ好きが多く集まる総会は盛況を極めたという。

11月には『第15回うへだ城下町映画祭』が開催された。映画祭の15周年、信州上田フィルムコミッションの10周年、上田市の合併5周年が重なった今回の映画祭のメインゲスト・山田洋次監督は、監督生活50周年。祝福ムードいっぱい記念映画祭となった。

「映画やテレビのロケ地になると、ロケ地



市民の健康管理や子育て支援にフル稼働する「ひとまちげんき・健康プラザうただ」

これまで述べてきたように、広域圏の中核的都市としての存在感の拡充や、主要産業である観光振興を軸にした地理的要件にこだわらない都市間連携への努力、上田市の魅力を効果的に発信するための各種PR作戦は全体に奏功しているといえる。さらにそれが上田市の新たな魅力づくりへと効果的につな

## 周産期医療の確立がもたらす安全・安心な暮らし

上田市の行財政改革は平成14年度の大綱の策定で本格化した。その後、三位一体改革などの影響で紆余曲折はあったものの、人事制度をはじめとする市政運営にあらゆる角度からの見直しを行うとともに、市民協働の仕組みづくりや職員の意識改革、地域協議会の役割の増大化、民間活力の積極的な活用などの諸施策を実施することで、目標を着々と達成しつつある。

「今後はさらに市民が安全・安心に暮らしていける要件を整え、それを市民生活の新たな魅力としていかなければなりません。近年続いた豪雨被害や地震への備えなどの防災体制の拡充とともに、その最重要施策と考えているのが、上田市産院の移転新築による周産期医療体制の確立事業です」(母袋市長)

上田市産院が存続の危機に見舞われたのは平成17年。産科の医師不足に加えて、新研修医制度の開始などによる、信州大学から派遣されていた医師の引き揚げが発端となった。以後、いったんは廃院も止むなしと検討した母袋市長だったが、存続を願う市民グループの熱意に動かされ、産院の存続を決意。母袋市長が先頭に立って全国に医師を求め、情報と熱意で一人ずつ訪ね歩く地道な努力を重ねた結果、医師確保につながり、体制確立の目途が付いた。そして今、来年4月のオープンを目指し、新産院の建設工事が着々と進んでいる。

この話題について語る母袋市長の顔



映画「たそがれ清兵衛」(山田洋次監督)のロケ風景(矢出沢川)



市民の熱心な保存運動でロケ地としても人気の柳町

を訪ねる人が増えます。歴史的な素材の作品であれば、周辺のゆかりの地などを訪ねる観光客も増えます。いわゆるロケ地ツアーも非常に人気で、とてもありがたいことだと思っておりますが、従来は比較的、中高年のお客さまが多かったのも事実でした。ところがここ最近、これまで比較的少なかった若い女性の観光客が非常に増えているのです」(母袋市長)

平成18年度に約400万人だった上田市の観光客数は、平成22年度に約480万人に伸びている。しかし、主要観光スポットへの入込数を比較検討してみると、面白い事実が付く。平成18年度に約74万人だった上田城跡への観光客数が、平成22年度には倍以上の約156万人になっている。

実はその間、別所温泉や菅平高原、美ヶ原高原などの人気スポットを訪れる観光客数はそれほど増えていない。上田城跡への観光客

数の伸びだけが顕著なのだ。その根幹をなすのが母袋市長の言葉にもあった「若い女性観光客・歴女族の急増現象」である。

「平成17年に発売開始され、以後、爆発的に売れたアクションゲーム(いわゆるテレビゲーム)のソフトに『戦国BASARA』シリーズがあります。これには戦国時代の武将たちがゲームキャラクターとして大勢出てきますが、中でも真田幸村公のキャラクターが若い女性に大人気となり、上田城跡を訪ねる若い女性観光客が急増したのです」(母袋市長)

ゲームソフト『戦国BASARA』はやがてテレビアニメシリーズとなり、平成21年・22年に12話ずつ放映された。平成18年度から19年度にかけて約20万人増えた上田城跡への観光客数は、テレビアニメ版『戦国BASARA A』シリーズが始まった平成21年度に至って、前年度比80万人増を記録する。さらにそれ以後も着々と増え、今や上田城跡は市内第1位の人気スポットになった。

『戦国BASARA』で使われた真田幸村のキャラクターにちなんだお土産グッズも大人気だ。平成22年8月から12月までは、別所線の車両に真田幸村のキャラクターがラッピングされた『戦国BASARA真田幸村号』が運行され、やはり大人気を博した。

「若い女性観光客が増えれば、必然的にその他の観光客も増えます。そのため全国の観光地は、女性観光客誘致のための知恵を懸命



幸村公のファンが集結する真田幸村口マンウォーク(10月)

に振り絞っています。上田市もその例外ではありません。ゲームやアニメのキャラクターが要因となって、上田市最大の歴史的シンボルである上田城跡への若い女性観光客の訪問が急増するなど、まったく予測も付かないことでした」(母袋市長)

観光客誘致を成功させる最大の要因は、言うまでもなくその土地が持つさまざまな意味の魅力である。上田市のこの事例は歴史的遺産である上田城跡に、若い女性の心をとらえるストーリーが、ゲームキャラクターというビジュアルを伴って展開したことで、女性ファンには「まったく新しい魅力」と認知されたことによる。

その上に前述した真田幸村の生涯の大河ドラマ化や、真田三代にゆかりの各地との連携による広域観光などの企画がうまく回転すれば、若い女性によって思いがけず認知された観光地としての上田市の「新しい魅力」は、さらに盤石のものになっていくに違いない。



外国人との「多文化共生」も上田市の顔の一つ(ブラジル田舎まつり)

は実に晴れ晴れとしていた。周産期医療体制の確立は、地域が発展していくための土台であるのだから、それも当然だろう。また上田市への赴任を最初に決意してくれた医師たちの「決意の決め手」が、実は上田市の持つ豊かな自然や歴史、暮らしやすさ(労働環境、子育て支援など)、将来性を含め、理想の地域医療実践の場としての総合的な「魅力」にあったという話も漏れ聞

く。単なる都市の規模ではなくその「質的な魅力」が、医療体制構築に不可欠な医師の心を捉える要因になるという事実は、他の都市の関係者にとっても非常に勇気づけられる話ではないだろうか。

冒頭に述べた定住自立圏の形成も、その根底に地域で安心して子どもを産み、育てていくことができる安全・安心な環境がなければおぼつかない。地域の新旧の魅力を常に感じながら、市民が安全・安心に暮らすことのできるまち。さらに広域圏の連携などによって、外へ発展する芽も着実に紡ぎつつあるまち——。どこもかしこも「ロケ地だらけ」の感がある美しいまち上田市内をあちこち歩いている最中、そのような感想がしきりと湧いてきた。

(取材・文 遠藤隆)